

新たな教育課題と、 その先に見えてきた 新時代の高校の姿

学校現場において

さまざまな教育課題が顕在化した一方、

多くの先生方や関係者が

奮闘を続けてきたことで、

希望や可能性も見えてきました。

目の前の生徒にどのように向き合うことで、

新しい高校の姿はつくられていくのか。

教育の在り方に強い想いをもたれている

3人に語っていただきました。



秋田 喜代美

東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長

岩本 悠

地域・教育魅力化プラットフォーム 代表理事

千葉 貢

岩手県立大船渡高校 副校長

Part 1
コロナ禍で
浮き彫りになった課題感

——最初に、それぞれのお立場でコロナ禍で実感したこと、特に高校教育に関する課題感をお聞かせください。

岩本 感じたことは無数にありますが、第一は学校の価値を再認識できたことです。当たり前に行われてきたことが当たり前でなくなるなか、これまで学校教育が大切にしてきたこと、例えば安心・安全な居場所、つながりを通じて学ぶといったことを先生方は守り続けてきたんだと改めて感じました。離島を始め各地の学校支援に携わってきた私ですが、本当の意味でそれを自覚できた気がしています。

一方で課題も浮き彫りになりました。学びとは本人のものなのに、教師の指示がなくなった途端、学習が止まってしまうケースが多く見られました。今回、臨時休校に振り回されたわけですが、卒業したらいわば永遠の「休校」。学校という場がなくても学び続ける「自立した学習者」をいかに育てるかが改めて問われていると思います。

秋田 私は、大学で教職開発コースの教員として先生方の支援や授業研究をするかたわら、近年はOECDとも協力しながら「探究的な学びで高校生をつなこう」「どうしたら学び合いの場はつ

くれるか」といった中高生のワークショップにも積極的に関わっています。そうした場の中高生は、自分の意見をしっかりと発信し、積極的に社会と関わろうとするなど、すごいなと感じていました。この夏も、9カ国の高校生を中心に約300人がオンラインでつながり、「これからの学校や未来をどうつくるか」を話し合う国際フォーラムを開きました。が、「コロナで困った」とか「オンライン環境が整っていない」ということよりも、以前から学校教育が抱えてきた課題、例えば「知識伝達型の授業のままでいいのか」といったことや、「個人や社会のよりよい在り方(ウェルビーイング)とは何か」ということに対して鋭い意見が出てきたことが印象的でした。

一方で、休校中、各地の高校生に話を聞くと、「主体性を奪われていることが苦しい」といった意味の言葉が挙がってきました。どこか一方的な課題学習やオンライン授業において、自分のことを受け止められていないという感覚。高校生が本来もっている主体性を阻んでいるのだとしたら残念です。

千葉 私は公立高校の副校長として目の前の生徒にただ向き合ってきました。幸い岩手県は臨時休校は二日のみでしたが、それでも始業式に生徒が抱き合つて喜んでいる光景を見ると「学校を止めてはいけない」と強く感じまし



学校の「当たり前」が突如なくなつた 今だからこそ問い直したい 本当に大切なこと、任せてもいいこと

た。その後、高校総体が中止になり、落ち込む生徒はいたものの意外にも切り替えが早いです。本校は「大船渡学」という探究学習に力を入れており、他にも打ち込める探究テーマがあったことがモチベーションの維持につながったでしょう。また、東日本大震災で被災した子も多いのですが、そうした経験も影響しているのかもしれない。

岩本 まさに、つながりや関係性のおかげで探究的な学びに熱心に取り組んできた高校生は学びが止まっていないうです。ICT環境が整っている云々ではなく、普段から学びのPDCAを回していたからだと思います。しかも、さまざまな社会課題が発生するなか、自らの勉強のことだけではなく、「自分でできることは何か?」という問いをもつて、積極的に社会参画までしている。大船渡高校にもそうした生徒さんが大勢いると聞きますが、先生方は普段からどんなことを意識されているのですか?

千葉 本校では、「探究のテーマは生徒

のもの。教師が与えることはやめよう」とか、「生徒から出てきた課題を否定しないように」と申し合わせています。すると、大人では考えもつかないようなアイデアが出てくるし、背中を押すだけで「自走」し始める。教師は「伴走」するだけです。

それと、授業にも探究の要素を入れていく必要があると思っています。本校には、最初にお題を出したあとは、生徒同士で勝手に問題を解いていく授業を実践している先生もいます。「ヒントをあげようか」と水を向けても「自分たちで考えたいので必要ない」と言われるそうです。ただし、生徒が導き出した答えに対しては、「どうしてそう思ったの?」「それはなぜ?」と問い掛けるため授業は白熱します。そのように「総合的な探究の時間」を独立したものとせず、教科の授業や部活動を含め、あらゆる場面で探究的な学びの機会を広げたいと考えています。

岩本 主体性や協働性といった非認知的な力を育む際、何が影響を与える

かという環境なんです。例えば、失敗を含めて挑戦することが許される安心・安全の風土があるかどうか。指示命令の一方通行ではなく、問う・問われるという対話的なコミュニケーションがどれだけあるか。人と違うことを認められる包摂性がある場なのかどうか。そういった土壌があると、好奇心の芽が育まれ、多様性を受け入れ、自分自身に対しても問うことができるようになる。なので「待つ」というのは本当に大切だと思います。

秋田 「待つ」とは「見守る」とことなんですけど、「放任」に捉えてしまいがちなので話し続けたり、お膳立てしすぎたりする教師の性ってありますよね。



地域・教育魅力化プラットフォーム 代表理事
岩本 悠
いわもと・ゆう ●東京都生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20カ国の地域開発の現場を巡り体験記を出版。幼小中高校の教員免許を取得し、卒業後、ソニーで人材育成、組織開発、社会貢献事業などに従事。2007年より島根県隠岐郡海士町で隠岐島前高校魅力化プロジェクトを推進。15年から島根県教育庁と島根県地域振興部を兼務し、地域との協働による高校教育改革と人づくりに従事。島根県教育魅力化特命官。

keyword

新時代に対応した 高等学校教育の在り方

2019年4月文部科学大臣による「新しい時代の初等中等教育の在り方」についての諮問を受け、中央教育審議会は、初等中等教育分科会の下に「新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会」を設置。高校教育に関しても、先行する審議や提言等を基礎に置きつつ、「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」にて検討。●生徒の学習意欲を喚起し能力を最大限伸ばすための普通科改革など学科の在り方 ●地域社会や高等教育機関との協働による教育の在り方 ●時代の変化・役割の変化に応じた定時制・通信制課程の在り方を中心に議論を重ね、中間報告がまとめられたところ。岩本 悠さんは、その分科会、ワーキンググループ委員として積極的に提言している。(図は提出資料の一部※)

コロナ禍（臨時休校）における子供の姿から見えてきた
初等中等教育の成果と新しい時代への兆し

一方、今回のコロナ禍（臨時休校）において、教員からの指示がなくても学びを継続した生徒たちや、自分のためだけでなく、地域や社会のために自らICT等を学習・活用し、探究・活動した生徒たちの姿もあった。

【活動の一例】

<p>新学連 国立大附属高等学校 新学連 国立大附属高等学校</p>	<p>ICTを活用した学習支援等への挑戦 新学連が「ICT活用による学習支援」を推進し、授業の特色を顕微鏡と対するシステムを開発し、他校にも提供している。</p>
<p>新学連 国立大附属高等学校</p>	<p>仕事で実践した福祉活動の支援 新学連が「ボランティア」の活動内容を顕微鏡と対するシステムを開発し、他校にも提供している。</p>
<p>新学連 国立大附属高等学校</p>	<p>教員応援キャンペーン等の企画 新学連が「教員応援キャンペーン」を企画し、教員への支援に貢献している。</p>
<p>新学連 国立大附属高等学校</p>	<p>コロナ禍対応アプリの開発 新学連が「コロナ禍対応アプリ」を開発し、他校にも提供している。</p>
<p>新学連 国立大附属高等学校</p>	<p>若者の思いは自覚するな・プロジェクト 新学連が「若者の思いは自覚するな・プロジェクト」を推進し、他校にも提供している。</p>

こうした多くの生徒たちに共通する点は……

<p>つながり 教員や保護者、地域の大人など積極的に関与してくれる大人とのつながりがある</p>	<p>対話・協働 学校内外に本音の対話や協働できる仲間がいる 経験や成果を認める 仲間とのつながりがある</p>	<p>自立・探究 自分の興味、関心、やりたいことを 探究した経験がある 自分でPDCAをまわす 経験や習慣がある</p>	<p>社会・創造 地域・社会の活動や課題解決に参画・貢献したことがある 「未来は創れる」「社会は変えられる」と信じている</p>
---	---	---	---

個性・多様性（関わりと違うこと）や挑戦・失敗を受けとめる安心安全な環境、土壌がある
指示命令・上層下層、階層的というより、対話的で開かれた、非認知や自律性を尊重・促進する関係性、土壌がある

探究学習に関わっているある高校が、1年目は「姉妹都市との交流」を前提に教師サイドで内容を固めていったところ、生徒の意欲が薄れていったことを覚えていきます。けれど、次の学年

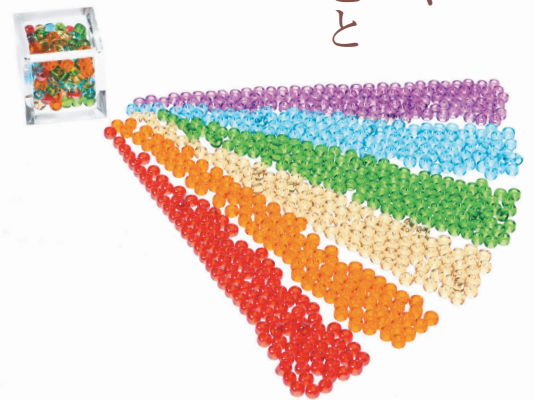
「これから」を語ることよりも ずっと大切なこと。それは「今」、 目の前の生徒に直に向き合うこと

の生徒は、「それは自分たちが決めたことじゃない」と、食文化をテーマにした独自の交流を模索していきました。「本当に交流したいなら形だけでなく積極的なコミュニケーションが大切」とも語っていて、心から友好を深めていく姿がありました。教育には本来「引き出す」という意味があるわけで、生徒にもっと委ねれば、もっと引き出せるのですよね。

Part 2 これからの学びとは、 学校とは

——お話しいただいた課題を乗り越えるためにも、教師や学校にはどのような役割が求められるのでしょうか？

秋田 一つは、生徒にさまざまな知のありようをつなぐインターフェースの役割でしょうか。生徒の質問に早出しで答えることなく、どこに焦点をあて、どういう言葉として戻せば思考が深まるかを考えながら問い返す。オンラインであつても、良質な問いやチャレンジングな課題を出す生徒は興味を



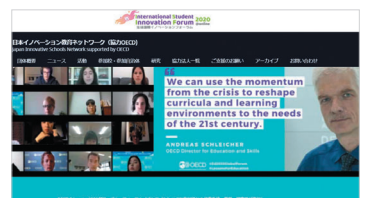
東京大学大学院教育学研究科長・教育学部長
秋田 喜代美

あきた・きよみ ●大阪府生まれ。東京大学文学部卒業後、銀行員、専業主婦を経て東京大学教育学部に学士入学。同大学院教育学研究科博士課程修了。博士(教育学)。立教大学文学部助教授を経て、2004年東京大学大学院教育学研究科教授。19年、東京大学初の女性学部長、研究科長に就任。専門は発達心理学、教育心理学、保育学、学校教育学。

keyword

日本イノベーション教育ネットワーク (協力OECD)

OECDの協力の下に生まれた産学コンソーシアムで、秋田喜代美さんは研究統括責任者を務める。東日本大震災の復興支援プロジェクトである「OECD東北スクール」を受け継ぎ、その理念を全国に広げるべく2015年に設立。2030年の地域課題解決に向け、海外や地域・企業などと協働をしながらプロジェクト学習、探究学習に取り組む。「生徒国際イノベーションフォーラム」をはじめとする国内外のフォーラムに生徒が主体的に参加。これらの実践を次世代の学びの開発と普及につなげるとともに、地域創生モデルの創出につなげることも目指す。



示します。それらを他の生徒にシェアすることで、その輪がさらに広がっていくわけで、これからは知識の伝達以上に、探究のタネの共有こそ公教育が担うべきだと思っています。

岩本 つなぎ役、伴走役という役割に加え、教師自身が「良き探究者」として、学び続けることが大切だと思います。探究のプロセスにおいては、学ぶことの喜びを感じると同時に、モヤモヤ感も出てくるわけで、そういう気持ちを抱え続けることが大事な気がします。それがあれば、「教えてあげろ」という発想に陥ることはないでしょう。コロナ禍でフリーズしてしまう高校と、試行錯誤しながら前を向いてい

る高校の違いがあるとすれば、案外、先生方の探究への姿勢が影響しているのかもしれない。

千葉 同感です。コロナが今後どうなるかなど誰もわかりません。だからこそ探究なんじゃないでしょうか。探究がうまくいっている学校の教師は、生徒と一緒に考えながら、わからないことを素直に、「私、わかりません」と言える勇気があるような気がします。

秋田 先程、モヤモヤ感を抱えることも大切という話がありました。例えば講演を聞いたとき、「なるほど、いな」となりやすい人って、納得しているようで、意外と自分の内面と向き合えていないことが多いんです。一方で、

「えっ、この人の言うことは本当?」「そうかもしれないけれど、こういうことも言えるのでは?」などモヤモヤしたものを抱える人は、自分の内面を一度くぐっているため、課題を自分事化しやすい。それも一つの探究の在り方なわけで、そうした探究者としての姿を生徒に見せることも教師の役割だと、お話を聞いて感じてきました。

千葉 あとは一人で抱え込まないことですよね。一人で生徒全員を見取れないのは当たり前。担任や学年主任などに責任を押し付けず、皆で生徒のいろいろな姿を把握していく必要があると思います。特に、芸術科目や保健体育、養護の先生には、座学中心の先生には



岩手県立大船渡高校 副校長
千葉 貢

ちば・みつぐ●岩手県生まれ。慶應義塾大学文学部英米文学科卒業。大船渡高校(定時制)、前沢高校副校長などを経て、19年大船渡高校副校長。初年度は70周年記念行事や佐々木朗希投手をめぐるマスコミ対応などに追われる。同校の探究学習「大船渡学」を学校の核とし、さらなる進化を模索中。

keyword

大船渡学

2016年より行われている大船渡高校独自の探究学習。地域をフィールドにするが、あくまで生徒の学びたいことをテーマにした「大船渡を学ばない大船渡学」として、1・2年の全生徒と全教員で取り組む。何を学びたいのかを自分と向き合いながら、探究したいテーマを通じて「自己実現する力」を育成する。その際、課題発見能力を重視し、「問いだし」のプロセスに重点を置いている。「総合的な探究の時間」とは別に、昨年度から、1・2年生の夏季・冬季の課外授業をやめ、「大船渡学夏の陣・冬の陣」と名付けて5日間の探究活動期間を設けている。4日目と最終日には探究テーマを基に生徒全員が15分の「模擬授業」を行う。3年生になっても探究テーマを追求し続ける生徒も多く、主体的・自発的に「模擬授業」を行う生徒もいる。



は探究テーマを基に生徒全員が15分の「模擬授業」を行う。3年生になっても探究テーマを追求し続ける生徒も多く、主体的・自発的に「模擬授業」を行う生徒もいる。

家庭や地域の人たちの力も借り
皆が共に生きる環境をつくる。
その拠点に学校はなるべき



見せないような表情をすることも多い
ため、情報を共有するといいでしよう。
秋田 いろいろな先生が生徒のさまざま
な面を捉え、認めてあげられる工
夫ができるといいですね。それには、
日常から教職員の横の関係が大切に
なっていくと思います。

な示唆を含んでいると思います。
——では最後に、どうすればこの経
験を、生徒の未来に活かせるとお考
えでしょうか？
岩本 皆さんのお話を聞いていて、先程
の「わからない」から始めるのと同じく、
「できない」を受け入れることが大切だ
と感じました。今回、否が応でも自
分たちだけではどうしようもない部分
が露わになったわけです。そのため、こ
のタイミングで、「自分たちの学校にとつ
て、本当に大切なことは何なのか」を
問い直し、大切なものを大切のまま残
すために、任せてもいいことは外部に
頼ってみてはどうでしょう。確かに、な
にかと学校や教師のことを批判したが

る人はいますが、一方で子どもたちの
未来のために何かできることはないか、
と考えている人もたくさんいるわけ
です。社会とのつながりを強めるまたと
ない機会ではないでしょうか。
千葉 その通りで、必要に応じて助け
を求めたいんです。「今、大変なん
でお願いします」と言えば、ありがた
いことに保護者は快く引き受けてく
ださいますよ。本校では自治体とのバ
イブを強化し、さまざまな機関と情
報共有し連携しています。多様な生
徒がいるなかで、一人ひとりの生徒に
真剣に寄り添うためには、学校だけ
ですべてを負わず、家庭や地域の人の
力も借りて当然。共に生きる環境
をこの地域につくっていきたくし、その
拠点に学校がなるべきだと思っていま
す。

して捉えること。「私のことを先生は受
け止めてくれてる」という満たされ
た感覚があり、一人ひとりにとって学
校が居心地のいい場(スクール・ウェル
ビーイング)となれば、自ずと学びたい
という気持ちは強くなっていくでしょう。
OECD東北スクールの活動中、「過
去を超えます。常識を超えます。国
境を超えます」という語を高校生がつ
くりました。コロナ禍をきっかけに、
私たち大人も過去の常識を問い直す
機会ができましたし、オンラインで学
校や地域の壁も越えやすくなりました
。学校を開いていくことで学びは広
がり、そして深まっていくでしょう。
先生方の指導のスタイルは、いろい
ろな歴史のうえにつくられていること
はわかりますが、この揺さぶりは問い
直しのチャンス。ベテランの先生も若手
の先生も、地域の方々やICTの力も
借りながら、今まで以上にワクワクし
た学びをつくりにいきたいと思います。その
先に、生徒の未来が広がっていくのだ
と信じています。